

# ほとけの 混和会だより

平成二十八年五月  
東光院  
仏の混和会  
第119号



比叡山延暦寺の根本中堂

## 最澄様は、慈愛心会得の道場として、比叡山を開かれた。

本日は大乘仏教の道場、比叡山延暦寺を開かれた伝教大師最澄様の御心に少し触れてみたいと存じます。最澄様は延暦四年、十九歳の時、奈良の東大寺に於いて具足戒を受けられました。この具足戒を受けると言う事は、国家公認の僧侶として一生が保証される大変名誉な事です。しかし最澄様はこの具足戒を

受けてわずか三ヶ月の後に、都の崇誉を捨てて、比叡の山奥に入り草庵を結んで修行に専念されたのです。その当時、奈良の都の人々は度重なる遷都により、貧困と飢餓、更に疫病などによって苦しみの極地に居ました。

しかしそれを正す皇族達は、権力争いに明け暮れ、僧侶までも権力の座を得ようと目論む人まで現れ、みんな己だけ幸に成れば良いとか、己だけ良い地位が得られるようになどと、己の悟りだけを求める利己主義的な小乗の思想が蔓延し、人々に慈悲の手を向けるような人はおられなかったのです。

そこで最澄様は己だけの悟りを求める小乗の教えより、大きな乗り物に乗って、人々と共に安心に満たされる悟りの境地に至れる教え大乘仏教の慈悲心を会得する為、比叡の山奥に籠もられたのでした。

その後、最澄様の志が桓武天皇に認められ、国家公認の大乘仏教の道場として、慈悲の御心を育む人材育成の聖地として、比叡山が確立されて行くのでした。よって、「おもてなし」とか「なさけ」「おかげさま」などという日本独自の文化が築かれました。

## 僧侶である 私は地獄に落ちる。

大変恐ろしいタイトルを掲げてしまいました。僧侶である私は、まさに地獄に落ちて行くように思われるのです。

と言うのは「施す者は天に生まれ、受くる者は獄に入る」と最澄様が諭して下さって居るのに僧侶である私は、皆様の優しさを受けるばかりで何の施しも出来ていませんでした。ほうせ

## おかげさまを忘れた時から、 地獄の苦しみが始まる。

東光院の諸行事は、おそばを打って下さる人やご接待をして下さる人、更に準備をして下さる人々、様々な人々のおかげで、諸行事が執り行われてきました。

その様々な人々の功德によって、東光院が守られて来たのですが、十数年も同じ事を行っていると、私は、それがあたりまえのようになって、「おかげさま」と言う感謝の念を忘れ、「俺がしてやっている」などとおごり高ぶり、慢心した心がわき上がって来たのです。何とも恐ろしい事で御座います。

私達の心は、貪り、怒り、執着、おごりなどから迷いや苦しみの境地に至ったり、時には仏様のよう

に慈愛心を抱いたりもします。そして、仮に天上の境地に至ったとしても慢心した心から地獄の苦しみの境地に陥ったり、或いは地獄の苦しみのおかげで己の過ちに気づき、仏心を得たりと、地獄から仏の境地まで十段階に分けて己の心は何時も揺れ動いております。

「十界互具」この己の過ちが無にならぬように、己の行いに素直に、又謙虚に懺悔と感謝の念を抱き、全て御仏の導き「おかげさま」と受け止めて参りたいと存じます。

## 生かされていると感じ取れた時、極楽の道が開かれる。

私たちは、様々な人々と相互に関係しあい、支えられ、大いなるものの力、お陰、恵みや導きを受けて、共にいかされております。自分ひとりでは、生きていくことはできません。最澄様の大乗仏教の御教え、共に生きる慈悲の御心に改めて努めて参りたいと存じます。合掌

## 日本の仏様



日本仏教に登場する仏様を、毎号少しずつ紹介。今回は明王部の不動明王について紹介します。

### ●明王部 不動明王

不動明王と言えば不動さんと言う名で親しまれている仏様ですが、元々はヒンドゥー教に出てくる神様でした。その時の名前をアチャラハナララといいますがアチャラは「動かない者」ナララは「守護神」の意味があり、それを漢訳し不動明王と名付けられました。

不動明王は、大日如来が悪魔や煩惱を滅するため、変身した姿とされ、歯を食いしばった表情、剣と羅索と呼ばれる縄状の物を持ちながら炎をまとう何とも恐ろしい姿をしています。剣は煩惱を切り捨て、羅索は人々を迷いの世界から救い出し、背中の炎で煩惱や迷い事を焼き尽くすためだと言われています。

この不動明王が日本にやってきたのは、空海が中国より不動明王を本尊とする密教の経典を持ち帰った事からでした。空海が持ち帰った密教の教えでは、真言と呼ばれる漢訳されていない、お釈迦様が口にしたそのままの言葉(真の言葉)と、印と呼ばれる手指を使って様々な形を作り、その形によって様々な仏様やその世界を表現する手法があります。それらを用いられる護摩行では、行者が不動明王の火を以て、人々の迷いや心の病氣など、



成田の地にて  
不動明王に護摩祈願  
を行っている図

心に宿る不浄な物を焼き払い、仏様のご加護を得るとされています。そのため、厄難除災に効果がある仏として、国家護持に加えて貴族階級の人々によって安座祈願や治病などの祈禱として信仰されることになりました。また、不動明王は修験道においてもとても重要とされています。修験道の基本的な考えは、修行する山を一つの仏教の世界に例え、その中心に不動明王の住む聖域があり、その靈力を体得する事にあります。特に、不動と言言葉は動かない大山をも差し、山の守護神として、修験道の本尊としても相応しい存在だったのでしよう。江戸時代になると関東地方では成田山の発展が大きくなり、人々に多くの御利益を与えてくれる力強い仏様として、密教の枠を超えて多くの人々に馴染んで行き現在に至ります。まだまだ先ですが、年末年始に護摩祈願を行っているお寺さんにお参りに行く事がありましたら、そのお堂に祀られている仏様を確認してみてください。恐ろしい顔をしながらも見守ってください。不動明王が必ずいるはずですよ。

## 花祭りが行なわれました



日中は暑くなる事が多くなり、夏の到来を感じつつある今日この頃、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

さて、先日 東光院境内にて、お釈迦様の誕生日「花祭り」が行なわれました。当日は天候に恵まれ桜吹雪の舞う中での行事遂行となり、あと一日遅ければ雨風で桜も散ってしまったことから何とも絶妙な日取りであったかと思えます。

花祭りは正式には降誕会、灌仏会といい、「仏に灌(そそぐ)」という意味合いは、はるかインドでお釈迦様が生まれるになった際、天から甘い雨(甘露)が降り注ぎ、その身体を清められたという伝説にちなんでつけられたとされています。その為、花祭りではこの事象をなぞらえ、花御堂の



また、深大寺においても甘茶の接待を行なっておりますが、ご年配の方を中心に「小さい頃に田舎のお寺で飲んだ味」と懐かしむ声を多くいただきました。今は行事としてはクリスマスやハロウィンなどの方が有名ですが、松尾芭蕉に「灌仏会 黻(しわ)手合わする 数珠の音」という句があるように、灌仏会は昔から行なわれてきた行事の一つだったのです。



しかし、現在行事を起すことの負担から花祭りを行なうお寺も少なくなくなり、仏様に甘茶をかけてお参りする機会も減ってきています。お子様が大きくなりお孫さんを持つような年代になった頃、ふと訪れたお寺で花御堂の誕生仏に出会い、幼い頃に家族で楽しんだ花祭りの記憶がよみがえれば幸いかと思います。(写真はビーズポイントのバルンアート教室と福ちゃん先生のサイエンス教室) 合掌